

報道関係各位

3 万年前の航海 徹底再現プロジェクト

主催：国立科学博物館

協力：与那国町 沖縄県立博物館・美術館 NPO 法人国境地域研究センター 石垣市 竹富町
竹富町教育委員会

後援：沖縄県 沖縄県教育委員会

オフィシャル・サポーター： JAL/JTA/RAC ルミネ

西表島へ出航準備完了

風と波が収まるのを待って、草船 2 艘を出します

直前記者会見（7/11）の概要

★重要なお知らせ★

7/12の出航をあきらめ、出航日を**7/13日以降**に変更します

台風 1 号通過後の強風と波が収まる見込みが立たないため、12日の出航をあきらめ、13日以降のどこかで出航することにいたしました。当初、出航候補日を7/12～14日に限定しておりましたが、15日は可能性として残すことにしました。それ以降、どこまで中止判断を延ばすかについては、海況の変化を見ながら検討します。

主な内容

- ・ 与那国島→西表島 航海の概要
- ・ 本番用の草舟を披露
- ・ 西表島を目指す 19名の漕ぎ手チーム紹介
- ・ メンバーと漕ぎ手から一言

出席者

プロジェクトメンバー

- 海部陽介（国立科学博物館、プロジェクト代表）
- 池谷信之（明治大学黒耀石研究センター、考古学）
- 石川 仁（(社)ONE OCEAN代表、草舟製作者・探検家）
- 内田正洋（海洋ジャーナリスト、シーカヤック航海者）
- 後藤 明（南山大学、海洋民族学）
- 村松 稔（与那国町教育委員会、漕ぎ手）

漕ぎ手チーム

下記参照

与那国島 → 西表島航海の概要

- ・ 3万年前の航海の可能性として「漕ぎ舟としての草舟モデル」を実践し、その妥当性を検証することを目的とします（詳しくは7月5日付けリリースをご覧ください）
- ・ 与那国島のカタブル浜から西表島のシラス浜を目指す予定です。直線距離で75km、蛇行することを考慮すれば90km以上になる可能性があります。
- ・ 7月13～15日の間に海況を確認し、朝5時頃に出航します。
- ・ 30時間超（あるいは）の航海となる見込みなので、到着は出航翌日の午後になる見通しです。

- ・ 7人乗りの草舟2艇で航海します。各舟で6名が漕ぎ、1名は舵を取ります。3万年前に漕ぎ手の交替はできませんので、最後まで漕ぎ切ることを目標にしますが、漕ぎ手の安全と健康に配慮して交替を認める場合があります。交替要員は伴走船に待機しています。
- ・ 航海中に漕ぎ手は短い休憩をとりますが、漕ぎを止めると舟が風や潮で流されて行きますので、夜間も含めて大勢あるいは全員が同時に休憩することはありません。どのように休憩をとるかは漕ぎ手たち自身が考えます。
- ・ 伴走船2艇が草舟を追います。草舟の漕ぎ手はホイッスルつきの腰巻型ライフジャケットを着用し、夜間に落水した場合に備えてストロボライトを装着します。夜間には草舟に竿を立てストロボライトを点灯します。
- ・ プロジェクトメンバーとして、海部代表と内田航海アドバイザーが伴走船に乗船します。海部代表は、トランシーバを使って各草舟のキャプテンから航行状況の報告を受けます。
- ・ 草舟の航海に必要な食料と水は、全て草舟に積みます。やむを得ない場合を除いて伴走船からの補給はしません。食料の内容とその携帯法は、必ずしも大昔のものにこだわりません。
- ・ 今回の漕ぎ手は男女混合（6：1）です。漕ぐという役割は男女を問わず一緒です。
- ・ 各草舟の漕ぎ手チームにそれぞれキャプテンをおきます。古今東西を問わず共通する船の“ルール”に従い、航海中、漕ぎ手たちはキャプテンの指示に従います。
- ・ 西表島を目指してどのように進路をとるか（ナビゲーション）、いつどのように休憩するか、どのタイミングで食事をとるかなど、草舟の上での判断は全て漕ぎ手たちが決めます。伴走船からは、危険を察知したとき以外いかなる指示も出しません。
- ・ ナビゲーション：夜間や、日中でも目標の西表島が目視できないときには、太陽や星の位置、風向きなどの自然現象を利用して方角を知ります。コンパスやGPSなどは使用しません。
- ・ 櫂（パドル）： 旧石器時代の櫂については手がかりが全くないため、縄文時代にあったタイプの櫂を流用することにします。
- ・ 衣服： 熱中症などの健康被害リスクを軽減することを最優先し、近現代の衣服・帽子を着用します。ただし出航時のみ、島で民芸品によく使われるクバの葉から作った簡単な蓑と帽子を着用する方針です。
- ・ 食事と飲料水： 昔から利用されていた可能性のあるドライフルーツやナッツ類を混ぜつつ、漕ぎ手が食べやすくカロリーのある現代食を草舟に載せます。飲料水は1人あたり10リットル程度を携行します。

本番用の草舟

テスト用舟が基本的にうまく機能したので（7月5日付けのリリースをご覧ください）、本番用にも同様のデザイン・サイズの舟をつくることとしました。ただし以下の理由で、本番用舟は若干ですが航行機能が向上していると思われます：

- ・ 草（ヒメガマ）をツル植物（トウヅルモドキ）でより強く束ねた
- ・ 左右の草の束のバランスが均等になるようにより注意深く作業した

- ・ 草はより成熟している状態のものを使った

本番用草舟のサイズはテスト舟とほぼ同じで、下記のとおりです：

テスト舟（参考）： 長さ6.4 m×幅1.3 m

本番用1号（舟の名は「どうなん」）： 長さ6.4 m×幅1.3 m

本番用2号（舟の名は「シラス」）： 長さ6.3 m×幅1.4 m

漕ぎ手チーム

八重山にあった太古のチャレンジの再現に、主に八重山（与那国島と西表島）在住の若者たちが、舟の作り手および漕ぎ手として挑みます。各候補者たちの舟漕ぎ経験はまちまちですが、誰一人として今回のような長時間を漕ぎ舟で航海した経験は持っていません。3万年前の祖先たちの初めての長距離・長時間航海へのチャレンジがどのようなものであったか、同様にはじめての壁に挑む漕ぎ手の彼らがヒントを与えてくれるかもしれません。

草舟1号（舟の名は「どうなん」：与那国の意）

入慶田本 竜清（与那国島・男 キャプテン）

村松 稔（与那国島・男 プロジェクトメンバー）

大部 渉（与那国島・男）

佐藤 純（与那国島・男）

山口 晋平（与那国島・男）

内田 沙希（神奈川県・女 スターナビゲーション経験者）

トイオラ・ハウィラ（ニュージーランド・男 スターナビゲーション経験者）

草舟2号（舟の名は「シラス」：西表島の目的地の浜の名前）

赤塚 義之（西表島・男 キャプテン）

碓 昌行（西表島・男）

岡 弘幸（西表島・男）

小淵 貴康（西表島・男）

清水 孝文（西表島・男）

田中 耕太郎（西表島・男）

中出 実希（与那国島・女）

補欠（伴走船で待機）

池間 有人（与那国島・男）

鈴木 克章（静岡県・男）

田中 雅洋（与那国島・男）

平野 麻紀（与那国島・女）

堀江 智成（与那国島・男）

※漕ぎ手の年齢：23～45歳 平均35歳

実験航海を目の前にしてメンバーと漕ぎ手からひとこと

- ◆ 海部陽介（国立科学博物館、プロジェクト代表）

4年の準備の末、ようやく最初の実験航海が始まる。実際に海へのチャレンジを体験することで、遺跡調査だけではわかりづらい祖先たちの生き様が見えてくることを期待している。

◆ 池谷信之（明治大学黒耀石研究センター、考古学）

船も漕ぎ手も揃ったのであとは天気期待するだけです。船首は既に西表島・白浜に向いています。

◆ 石川 仁（(社)ONE OCEAN代表、草舟製作者・探検家）

自分たちの手で刈り取り、草舟を作り上げ、海へ漕ぎだす。この一連の体験こそが古代からの手紙であり、未来への言葉なのだと感じている。

◆ 内田正洋（海洋ジャーナリスト、シーカヤック航海者）

本番用の2艘のガマカヌー、草舟が縛り上げられ、いよいよ大実験テスト航海への出航準備が整った。台風も抜けたし、ドゥナン（与那国）のカミサマにお参りし、陸心の憂さをきれいに晴らし、あとは風が収まるのを待つだけ、だな。

◆ 後藤 明（南山大学、海洋民族学）

人類と海の関わりを解き明かす、研究者人生をかける価値があるプロジェクトと思う。

◆ 村松 稔（与那国島・漕ぎ手・プロジェクトメンバー）

僕らは今日、草舟を見せられて、この与那国島から西表島へ行けといわれたわけじゃない。自らの意思で草を刈り、乾かし、舟を作り、海へ繰り出す。その上で航海に臨む。それは自然なことだ。

◇ 入慶田本 竜清（与那国島・漕ぎ手・草舟1号キャプテン）

誰も挑戦したことのない偉大なプロジェクトに参加できて光栄。ここまでの準備にご協力くださった全ての皆さまに感謝しています。

◇ 赤塚 義之（西表島・漕ぎ手・草舟2号キャプテン）

この航海は、シーカヤッカーとしての個人的経験から、主催者の予測より長い48時間ほどかかるのではと感じているが、最後まであきらめずに漕ぎ切りたい。

お願い：皆さまがプロジェクトの公式サイトをご紹介ください

記事配信にあたっては、本プロジェクトの重要な情報源である下記公式サイトをご紹介ください。URLを記さなくとも、「国立科学博物館のサイト内にある公式ホームページ」のような表現で結構です。

<http://www.kahaku.go.jp/research/activities/special/koukai/index.html>

※情報源として下記もごさいます

公式フェイスブック・ページ

<https://www.facebook.com/koukaiproject/>

本件の内容についてのお問合せ：

海部陽介

プロジェクトチーム代表、国立科学博物館人類史研究グループ長

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

TEL: 080-1324-3008 (携帯) (※メディアの方限定でお知らせしております)

E-mail: kaifu@kahaku.go.jp

その他のお問合せ：

国立科学博物館研究活動広報担当

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

TEL: 029-853-8901 (代表)、029-853-8903 (直通)

E-mail: outreach@kahaku.go.jp

画像提供

今回の報道用に下の資料・画像を提供できます：

※クレジット表記：国立科学博物館「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」 ただし短縮したい場合は“国立科学博物館”を削除して構いません。写真は全て、本年7月の活動中に与那国島で撮影したものです。適宜トリミングして頂いて結構です。

以下からダウンロードしてください

<http://firestorage.jp/download/306d622eaa3d8c564c8b25f2e74d3d33af6aba9c>

ダウンロードパスワード 0zt9fqgs



完成した本番用の草舟と舟を作った漕ぎ手チーム（19名のうちの15名）



出航予定地のカタブル浜に運ばれた2艘の本番用草船



本番用の草船の上に乗った漕ぎ手たち



記者会見の様子



漕ぎ手チーム。襷にはクラウドファンディング支援者の名前が書かれている（2つとも）。



テスト舟による外海での航行テスト①



テスト舟による外海での航行テスト②